

本の ひろば

[月刊]キリスト教書評誌

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2017年9月1日発行(毎月一回発行) 第717号

ISSN 0286-7001

出会い・本・人

信仰者の臨場性

森 優

H.W.ホーランドル 著 / 池永倫明 訳

コンパクト聖書注解

コリント人への第一の手紙I 芳賀繁浩

本・批評と紹介

樽松かほる・大島 宏・高瀬幸恵他 著

戦時下のキリスト教主義学校 播本秀史

吉田 隆 著

カルヴァンの終末論 加藤喜之

栗林輝夫 著

栗林輝夫セレクション1

日本で神学する 辻 学

本屋さんが選んだお勧めの本

近刊情報

書店案内

渡辺和子 著

エサルハドン王位継承誓約文書

中田一郎

稲山聖修 著

カール・バルトにおける神論研究 崔弘徳

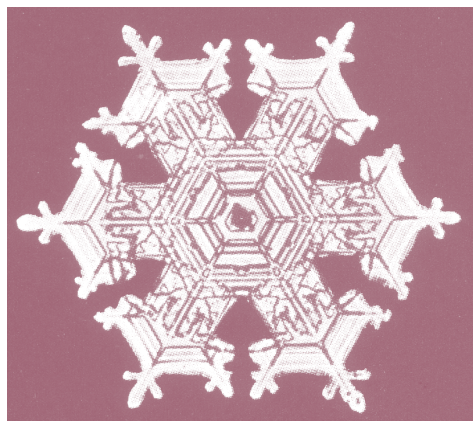
大頭眞一 著

焚き火を囲んで聴く神の物語・対話篇

藤本 満

金子晴勇 著

宗教改革者たちの信仰 久米あつみ



9 SEPTEMBER
2017

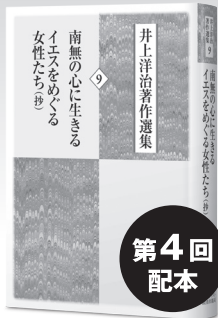
遠藤周作と志をともにし、「日本人とキリスト教」の課題を担った神父の著作選集

第2期 井上洋治著作選集

9

南無の心に生きる 山根道公 編・解説 若松英輔 解説 イエスをめぐる女性たち 抄

心に渴きを覚える現代人を真の安らぎへと導く南無の心を説く『南無の心に生きる』と、福音書に登場する7人の女性を通してイエスの温かい眼差しに迫る『イエスをめぐる女性たち』を収録。宗教学者・山折哲雄と、カトリック作家・安岡章太郎のエッセイも収める。



2017年8月18日刊行予定

◆A5判 上製・260頁・2,700円

シリーズ第2期刊行予定 各巻2,700円

第1期全5巻(1〜5巻)好評発売中! 各巻2,700円

- 6 人はなぜ生きるか/イエスのまなざし—日本人とキリスト教 抄 ▶好評発売中
- 7 まことの自分を生きる/イエスへの旅 ▶好評発売中
- 8 法然—イエスの面影をしのばせる人
風のなかの想い—キリスト教の文化内開花の試み 抄 ▶好評発売中
- 10 日本人のためのキリスト教入門/井上洋治著作一覧 ▶2017年12月刊行

2017年夏 キリスト教専門書店限定 『讃美歌21』刊行20周年記念

讃美歌21 特典付き セール開催中!



9/30(土)まで

『讃美歌21』+関連商品全44品から、

合計**10,000円**税別以上

お買い上げで、ご購入総額の**10%**相当の
出版局商品がもらえます!

対象商品は『讃美歌21』本体に加えて、楽譜やCD、関連本すべて!

詳しくはホームページをご覧ください

 [http://bp-uccj.jp/
publications/2017h21/](http://bp-uccj.jp/publications/2017h21/)





出会い・本・人 信仰者の臨場性——森 優

わたしが神学校に入学したとき、早く卒業した先輩の中に、伝説的な言い伝えを受けている人がいた。石田順朗（よしろう）牧師である。伝えられたのは、学業成績の優秀さだけでなく、神学校卒業後の伝道師のときに、開拓農村の伝道所に派遣され、一年後に、四六名の集団洗礼がなされたことである。理論的な伝道を志す日本のルーテル教会で、しかも、まだ授洗資格のない伝道師としては、まったく異例なことであった。

按手札を受けたのち、教会や留学を経て、三十六歳で、世界ルーテル連盟（本部ジュネーブ）世界宣教部門アジア担当幹事に招かれ、以後、宣教部門部長、神学研究部門部長に任ぜられ、さらに、シカゴ・ルーテル神学大学グローバル宣教センター室長も務めた。わたしにとって伝説の人にめぐりあったのは、石田先生が、世界ルーテル連盟の役職をもちながら、日本ルーテル神学大学の宣教学の講座を担当されたからである。わたしは、ルーテル教会の出版社である聖文舎の責任をとっていた。

石田先生は、現代の伝道が、神の伝道と言いつつ「人間の伝道」に転化しつつあるのではないかと、『教会の伝道』という一書を著された（一九七二年、聖文舎）。さらに、教会カウンセリングが興隆する中で、あまりに心理学優位の牧会がなされるのではないかと、『牧会者ルター』をまとめられた（一九七六年、

聖文舎）。教会の歴史と同じほど古い、牧会の歴史を掘り下げて検討していくものであった。さらに、わたしは、「信徒のための神学通信講座」の企画を先生に訴え、『みことばの説教者と会衆の神学』をスタートさせた（一九七七年）。会衆も聴くことにより説教に参与し、説教者と会衆は、ひとつとなつて福音を宣べ伝える者となる。会衆は、聴くことにより説教していることを、先生はまた熱く語りかけた。

わたしも牧師に戻り、さらに海外に出たりして、先生との再会は、編集者と著者の出会いであり、当然、先生のもつ、講演、説教、論文等の膨大な原稿の整理のことになった。こうして生まれたのが、『神の元気を取り次ぐ教会——説教、教会暦、聖書日課、礼拝』（二〇一四年、リトン）である。先生、八十六歳。

さらに、石田先生は、世界を駆けめぐり、人々と語り合い、論争してきた軌跡を、神学的自伝として著したいと意欲をもたれた。これは思い出の自伝でなく、先生が、神のみに臨場し、世界の教会の諸問題に、そして、この社会に臨場してきた証であった。石田先生は、新著の完成を熱望されていたが、二〇一五年十一月、天に召された。八十七歳であった。先生の遺稿を整理中のみま、わたしは抱えている。

（もり・まさる 日本福音ルーテル教会元牧師、株式会社聖文舎元社長）

国家の教育統制への対応に関する実証的研究
 樽松かほる・大島 宏・高瀬幸恵・
 柴沼 真・影山礼子・辻 直人著

戦時下のキリスト教主義学校



播本秀史

キリスト教主義学校は天皇制と抵触する。大日本帝国憲法第
 三条「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」と建前上その天皇の言
 葉としての「教育勅語」、さらには「文部省訓令十二号」が重
 く押し掛かる。

本書は「一九三七年以降の戦時下に於けるキリスト教主義学
 校が国家統制にどのように対峙、対応していったのかを資料に
 基づき実証的に明らかにした」（三頁）ものである。「一方的
 な抑圧や追従といった通念的な見方を再考」し、「日本の教育
 史・キリスト教史にとって重要な観測結果を提供する」（帯文）
 ものとなっている。

本書は「まえがき」、六つの章、「巻末資料」「あとがき」よ
 り成る。「まえがき」は樽松かほる氏が担当し、本書の成り立
 ちと各章の要点が示されている。「あとがき」は影山礼子氏が
 担当し、本書の成果と今後の課題が示されている。「巻末資料」
 は大島宏氏、高瀬幸恵氏による作成。資料1ではプロテスタン
 ト系とカトリック系との法人の目的の差異。資料2では法人の
 下にある各学校の目的の差異。資料3には訓令十二号に対する

学校側の抵抗（各種学校化）と文部省の圧力（財団法人化）が
 見て取れる。いずれも有益な資料である。

第1章「キリスト教主義学校に対する文部省の統制」（大島
 宏）——ここでは「法人の目的」に着目し、文部省による統制
 の対象やその意図、方法が明らかにされている。法人化するこ
 とによってキリスト教教育への規制を強化し、加えて「教育勅
 語」の趣旨に基づく教育に統制してゆく様子が描かれている。

第2章「立教高等女学校の妥協と抵抗」（高瀬幸恵）——「同
 校は、正規の高等女学校として運営されていたため、課程内外
 における宗教教育は禁止されていた」（六頁）が、御真影と教
 育勅語謄本の受け取りが一九四四年と遅かった。他の基督教教
 育同盟会加盟校は多くが一九三七年以降であった。一九三六年
 七月の同盟会議に於ける田川大吉郎の対文部省対策などと合わ
 せて考えさせられる。

第3章「同志社高等女学部への統制とその対応についての考
 察」（柴沼真）——同校は「各種学校であり続けることで、キ
 リスト教教育を実施する余地を残そうとしていた」（六八頁）。

しかし、キリスト教を破棄させるために、文部省は学費値上げ
 を認可する交換条件として、高等女学部を高等女学校とするよ
 う仕向けた。また、同志社理事会もそれに応じた。一貫してキ
 リスト教育を守るべく奮闘した「末光信三」を新設女学校の
 校長にする案に文部省が難色を示し、理事会も同意した。「固
 定的な歴史観を排する新しい事例的知見」の一例であろう。

第4章「関東学院の建学理念の「揺らぎ」（影山礼子）——
 外国人宣教師の減少（排除）、日本人理事の増加、ミッシヨン
 からの経済的独立、財団法人化が文部省対策の結果であった。
 一九四〇年の時点で関東学院が教育目的に「基督教主義」の文
 言を残せた背景に「横浜地域のキリスト教主義学校の団結した
 対応の成果があったらしい」（二〇一頁）の言及は一考に値
 する。基督教教育同盟会の在り方、働きと対比できよう。

第5章「興亜教育とキリスト教主義学校」（辻直人）——こ
 こでは積極的に時流に乗った学校として明治学院東亜科を中心
 として論考されている。戦時下の明治学院を概観し、矢野貫城

（はりもと・ひでし）明治学院大学教授
 間 接的にキリスト教主義学校の存在意義も問われる。一読をお勧
 めする。

（A5判・二三三頁・本体三七〇〇円＋税・教文館）

賛美歌作家としてのルターに
 迫った『礼拝と音楽』好評連載、
 待望の単行本化！



宗教改革者ルターは「歌う人」でもあった ルターと賛美歌 徳善義和

好評
 発売中

礼拝に会衆賛美を導入したのはルターであった。
 ルター研究の第一人者が、ルターの信仰から
 生まれた賛美歌を楽譜と現代語訳付きで紹介、
 その作られた背景、そこに込められた神学を
 解き明かす。 四六判 並製・250頁・2592円

『礼拝と音楽』誌面で
 取り上げられなかった
 16曲の現代語訳と
 楽譜も収録！

宗教改革500年記念 上記書籍も対象！

読者プレゼント
 キャンペーン実施中！

宗教改革を取り上げた書籍・雑誌の応募
 マーク（点数）に応じて図書カー
 ドがもらえるキャンペーンを実施
 中！詳しくはホームページで！



日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
 ☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
 E-mail eigyoku@bp.uccj.or.jp (価格8%税込)

http://bp-uccj.jp

衝撃的な問いかけに満ちた必読の書
栗林輝夫著

日本で神学する
栗林輝夫セレクション1



辻学

『荆冠の神学』（1991年）、『日本民話の神学』（1997年）、『現代神学の最前線』（2004年）などの著作で広く知られる神学者、栗林輝夫氏が亡くなって2年が経つ。このたび、栗林氏が遺した多数の文章から18編がまとめられ、「栗林輝夫セレクション」として刊行されることになった。本書はその第1巻で、11の論考と、『荆冠の神学』韓国語版への序文が収められている。

日本の神学者には、特定の（とくに欧米の！）神学者や思想を研究対象としている人が少なくないが、栗林氏はそのようなタイプではない。日本という場で「神学する」視座と力を持った、「稀有かつ傑出した存在」（編者の西原廉太氏）なのである。各論文は、だいたい時系列に並んではいないが、主題別の3部構成で、これは著者の思想的発展の軌跡を示すと同時に、栗林神学の視座・手法・実践を示す手引きにもなっている。

第一部「解放神学と日本」は4本の論文から成る。部落解放の問題を焦点とした「荆冠の神学」は、ラテンアメリカの解放神学（そして栗林氏自身が記しているように「三三八頁」、韓

国の「民衆神学」を日本の文脈において展開したものと、性格をもつが、解放神学の先駆者であるグスタボ・グティエレスを中心に論じた第1章「解放神学の選択・神は貧しい者を偏愛する」にはそのことがよく表れている。民衆の経験から出発して、「神は貧しい者の苦しみにいて顕れる」（四五頁）と言うグティエレスの理解は、間違いない栗林神学の基本的姿勢にもなっている。

続く第2章では、足尾鉍毒事件の闘いに生涯を捧げた田中正造、そして第3章では、黒人解放運動の先駆者にしてカリスマ的指導者であったマルコムXと、部落解放運動の創始者である西光万吉の生涯と思想の変遷を、解放神学および民衆神学の視点からたどっている。これらの論考には、現在の神学が「教会の学」に留まり、「教会の外の民衆の世界の事件に、あまりに無関心になってしまった」（九八頁）という栗林氏の神学批判、そしてどの視座で神学をすべきなのかという問題提起が込められている。賀川豊彦を「日本最初の解放神学者」と評価する第4章も同様である。

第二部「日本で神学する」を構成する3本の論文は、第一部で論じた、「キリスト教を貧しい者、抑圧された者との関係において、新しく再構築しようとする教會的ヴィジョン」（二二頁）を日本という文脈の中で実践するための手法を示してくれている。第5章「民話・ユング・聖書」は、『日本民話の神学』の補遺的論考で、ユング心理学によって物語を分析する試みを、さらに聖書の物語にも適用しようとする試みである。短い第7章「日本で神学する」は、教会の強化という内向き志向が強く、社会的責任に向き合う姿勢が弱い日本のキリスト教を正面から批判し、「課題志向」な神学を展開すべきだと主張する。

聖書学を専門とする評者にとって一番衝撃的だったのは第6章「『帝国論』におけるイエスとパウロ」である。2001年9月11日に起こったいわゆる「同時多発テロ事件」の当日、在外研究で米国に居合わせた栗林氏は、平和の問題、とくにアメリカにおける宗教と政治の問題へと神学的関心を集中させていった。ポストコロナアル批評によるイエスおよびパウロ研究の重要性を論じ、「対抗帝國的な教會論の構築を」（一七六頁）訴

えるこの章は、その成果の一つだが、パウロ主義批判の枠から出られずにいる新約聖書学に対する厳しい問題提起にもなっている。

第三部「環境と技術の神学」に収められた4本の論考は、栗林氏が最期まで取り組み続けた原発問題に関するものである。第8章「原発と神学」、第9章「キリスト教は原発をどう考えるか」、第10章「原発とテクノロジーの神学」はいずれも、原発事故が招いた危機的状況の中で神学するとはどういうことかを、文字通り命を削りながら著者が示した実践の記録である。第11章「原発と田中正造の環境／技術の神学」で栗林氏は再び、田中正造の実践と向き合い、そこに環境神学の手本を読み取っている。

著者が遺した「日本で神学する」課題をどう果たしていけば良いのか。読む人間の「プラクシス」（二二頁）が問われている。（つじ・まなぶ）
広島大学工学院総合科学部研究科教授
（A5判・三五〇頁・本体三六〇〇円＋税・新教出版社）

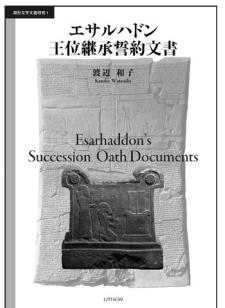
夜の客
遠いあなたへ
不思議な縁
高橋たか子

《ラジオドラマ台本》
他の個とコミュニケーションする対話と
自問自答の“思い”を表現する独白が
意図的に混在する見事な詩劇！
「高橋たか子は、テレビドラマを嫌い、ラジオドラマを愛した。作品の映画化はことごとく却下したが、ラジオドラマは別だった。文字にすべてを託す作家でありながら、文字よりも声を信じていたからだ」
鈴木晶（評論家、翻訳家）
特別収録 NHKラジオドラマCD 〔語り手〕 岸田今日子ほか
四六判・上製
定価【本体3,200＋税】円
ISBN978-4-86325-100-7

株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

最新かつ理想的なテキスト出版
渡辺和子著

エサルハドン 王位継承誓約文書



中田一郎

アッシリア王エサルハドンは、没後に、自分が経験したのと同じような後継者争いが起こらないよう、前六七二年、帝国中枢部の役人達だけでなく、七十余の属州の代官達やアッシリアに服属する周辺諸国の支配者達を集めて、王子アッシルバニパルをアッシリア王に、またもう一人の王子シャマシユ・シユム・ウキンをバビロニア王とすることを定め、この決定を遵守するよう出席者に誓約させた。出席者には、粘土板に書かれた王位継承誓約文書（以下「誓約文書」）が一部ずつ渡され、これを「神のごとく」守ることが求められた。

これらの誓約文書の断片三点が一九三〇年以前にアッシユルから、また一九五五年にもともメディア地方の代官達に出されたと考えられる九点の誓約文書がニムルドから出土した。ニムルド出土の誓約文書は、一九五八年にD・J・ワイズマンにより「エサルハドン宗主権条約」として出版された。

著者渡辺和子氏は、一九八〇年代に、留学先のハイデルベルグ大学で、ワイズマンが「エサルハドン宗主権条約」と呼んだ文書の再編纂に取り組み、ニムルド出土の文書に、当時知られ

ていたアッシユル出土の断片一つと大英博物館所蔵の未登録未公開のニムルド版断片を加えて、『エサルハドンの王位継承の定めに際してのアデー誓約文書』と題する学位論文（独語）を完成させ、一九八七年に出版した。ワイズマンが「宗主権条約」と呼んだものは、正しくは、誓約文書（アデー）であるというのが、著者の学位論文の重要な論点の一つであった。

二〇〇九年になってトルコ南部のテル・タイナトで同文の誓約文書が「元あった場所」ほぼ完全な形で発見された。これは、当時アッシリア統治下のこの地に本国から派遣された代官に対して発行されたものであった。その結果、このテル・タイナト出土文書は、これまで宗主権条約と考えられてきた文書が誓約文書であるという著者の主張を裏付けるものとなった。

本書は、エサルハドンの王位継承誓約文書の「総譜翻字」およびそのトランスクリプションと日本語訳に概説と訳注が付されたもので、テル・タイナト出土文書とその研究成果を取り入れた最新で、理想的な形のテキスト出版である。

訳された誓約文書に、「もしあなた方が万が一にも、（この誓

約の書板を）他の場所へ移すならば、ギラ（＝火の神）にゆだねるならば、（中略）何らかの技巧を用いて破壊するならば、失わせるならば、表面を削り取るならば――」（s.36）といった一見未完結の文章が多出することに戸惑う読者がおられるかもしれない。この訳はアッカド語に対する著者の確固たる理解とこだわりに基づく。概説の一七頁以下を是非お読みいただきたい。

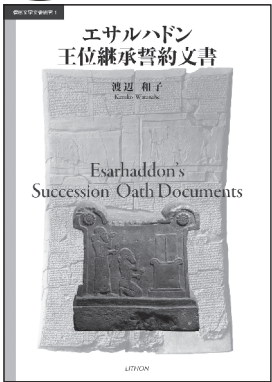
本書の概説部分では、主君への忠誠心涵養は家庭教育で行うとか（四〇―四二頁）、長大な呪いの言葉の集積は多様な価値観の「普遍化」の試みであるとか（四二頁）、「アッシユル神はあなた方の神」と宣言することにより、アッシリアの支配下で、それぞれの神々を崇拝しながらも、誰もが一律に同じ神を敬うというある種の一神教の導入として受けとることもでき、ユダ王国における契約（誓約）に基づく一神教形成に影響した可能性が高い（四七頁）、などいくつつか大胆な見解が披露されている。

著者は、また、この誓約文書が親アッシリア政策を取っていた当時のユダ王国のマナセ（在位前六八七―六四二）にも渡され、エルサレム神殿に安置されたはずだと考える（五一頁）。マナセの後一人おいて即位したヨシヤ（在位前六三九―六〇九）は、前六一二年のアッシリア帝国滅亡を機に、政治的・宗教的に独自の路線を打ち出すが、その際この「ヨシヤ改革」のための精神的支柱となったのが、「神殿で発見された契約／律法の書」（列王記下二二・八―二三）であった。著者は、エサルハドンが誓約文書を各地の神殿に安置しそこに記された誓約を遵守させることにより帝国の統治を計ろうとしたことが、エルサレム神殿で発見された律法の書に基づく「ヨシヤ改革」に何らかの影響を与えたと（五一―五二頁）示唆する。

（なかつ・いちろう＝中央大学名誉教授）
（A4判・三二二頁・本体六四〇〇円＋税・リトン）



新刊



エサルハドン 王位継承 誓約文書

渡辺和子 著

●A4判上製 本体6,400円＋税

前672年にアッシリア王エサルハドンによって大量発行・配布された「エサルハドン王位継承誓約文書」は、粘土板に楔形文字のアッカド語で刻まれている。それは、多様な文化的背景をもつ人々を擁する大帝國となったアッシリアにおいて、最高神アッシユル以下「全世界」の神々の前でアッシリア内外の要人たちに、次の王（皇太子）への忠誠を誓わせた誓約文書であった。本書は、近年トルコで発見された一つの新文書を含むテキストの再編纂、構成と文法の解明、全文の本邦初訳を含む。さらに本文の新しい解釈に基づいて、ユダ王ヨシヤの改革及び「申命記」、そして宗教史に与えた影響の可能性について論じる。

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

バルト神学を別角度から再解釈する
稲山聖修著

カール・バルトにおける神論研究
神の愛の秘義をめぐる考察



崔弘徳

本書は、日本において一般になされてきたK・バルト (Karl Barth, 1886-1968) 神学への解釈に疑義を抱き、別の視点から新しい解釈を試みるものである。著者によれば、日本ではキリスト教と他宗教や文化との緊張関係の中で、バルト神学の排他的な側面ばかりが強調されてきたのだが、それは「神は神であり、人間は人間である」あるいは「神と人間との間における無限な質的差」という命題に見られるように、「神の神性」を強調するバルトの初期神学をパラダイムにして彼の全神学を把握する「偏った見方」によるものである。

このような事態を踏まえて、著者は、バルトがアンセルムス (Anselmus, 1033-1109) 研究、そしてFr.シュライアマハ (Friedrich Daniel Ernst Schliermacher, 1768-1834) との対決・受容のプロセスの中で、「神の人間性」をも前面に打ち出したと力説する。付け加えて説明するならば、アンセルムスにおいては人間が神認識において神の存在様式に「参与」する存在として、また、シュライアマハにおいては神が「絶対依存の感情」(das schlechthinige Abhängigkeitsgefühl)

に共に措定されている存在として理解されている。とりわけ、「絶対依存の感情」は「神の根源的啓示」(die ursprüngliche Offenbarung Gottes) であって、根本的な意味ではイエス・キリスト、つまり彼における「神・人」性の次元を指すものである。

こうした内容と関連して、著者はバルトの後期神学、特に『神の人間性』(Die Menschlichkeit Gottes, 1956) にあらわれている神と人間との関係に着目した上で、その事柄の本格的な教説を『教会教義学』「神論」における「秘義概念」に見出し、論を展開していく。秘義概念において、核心的なのは「神の愛」である。それは神の属性であって、バルトの三位一体論のみならず、受肉論にいたるまでその根底に横たわっている。もともと神にとって人間はその愛の対象である。換言すれば、神は人間と交わる存在なのである。したがって神は、決して人間・歴史・文化といったものを否定するわけにはいかない。こうした面がバルト神学の真相であると、著者は主張するのである。

本書の大きな特徴は、バルト神学とシュライアマハ神学や

一九世紀のプロテスタント神学とを対立的に捉えるのとは違って、その関係を肯定的な側面から捉えていることである。特に、シュライアマハ神学との関連で言えば、若いバルトはシュライアマハ神学を指して人間が神学的課題となっている宗教意識の神学、つまり「人間学」(Anthropologie) に過ぎないと批判していたが、後になっては、むしろその「聖霊の神学」としての可能性を認めたと指摘する。そこで著者は、シュライアマハとバルトの神学における神学的主題は「神」のみではなく、「神と人間」であると洞察したのである。こうした点からすれば、日本ではバルトの初期神学を判断基準にしてプロテスタント思想史を——とりわけシュライアマハや近代プロテスタント神学を——批判する傾向が強かったと言えるが、本書の場合は、むしろバルト神学をプロテスタント神学思想史の中に位置づけ、また彼の後期神学を分析した上でその再解釈を試みていると評価することができよう。このような視点からのバ

ルト神学の再解釈が、彼の他の神学的主題においても続いてなされることを望む次第である。

(ちえ・ほんどくり同志社大学神学部嘱託講師)
(A5判・二〇〇頁・本体二〇〇〇円＋税・キリスト新聞社)



新刊
生命の宗教
キリスト教

「神」をめぐる哲学的考察

竹田純郎著

●A5判並製 本体2500円＋税

近代の思想家たちが「神」をどのように解したか、時代を追ってあきらかにし、乏しき時代における生命の宗教、キリスト教の可能性を探る。

【目次】より

- 序章 生命の宗教、キリスト教
一乏しき時代における宗教の可能性一
- 第一章 暗い時代の人レッシング、無一物なる生
- 第二章 シュライアマハ、プロテスタント神学のカント
- 第三章 謎めいた老人ディルタイ、さ迷えるキリスト者
- 第四章 漂泊者ニーチェ、イエスの道化師
- 第五章 近代市民ウェーバー、アジア的キリスト者
- 第六章 境界の人A・カミュ、匿名のキリスト者
- 第七章 無即愛の弁証者田辺元、成りつつあるキリスト者
- 終章 乏しき時代における生命の宗教、キリスト教の可能性

ISBN978-4-86376-059-2

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

近代と繋がる「深海流」を探る
金子晴勇著

宗教改革者たちの信仰



宗教改革者たちの信仰
金子晴勇 Haruhiko Kaneko

久米あつみ

長年ルターとエラスムスの研究を中心に、近世ヨーロッパの精神史を探ってきた金子氏が、ルターの宗教改革五〇〇年（「ルター」と付けたのは金子氏自身）にあたって宗教改革者たちの働きを信仰・霊性の面を中心に考察したのがこの書であり、一三の章からなる叙述は、読みやすい概説書の印象を与える。しかし「はじめに——信仰を源泉から学び直そう」と題する序言は、著者の属する教会での試みを取り上げて、宗教改革から信仰そのものを学び直す必要を語っている。つまり著者は今、宗教改革者たちの思想と行動の内にキリスト教信仰の生命力を探求すべきではないか、と読者に呼びかけており、観想的な書齋の書でもなく、宗教改革者たちへの賛辞の書でもない。

「宗教改革者たちの信仰」の章で、著者はエラスムス、ルター、カルヴァンの三人を、学問・方法・霊性の観点から再考してその信仰の特質を検討する。霊性とは「信仰の主體的な作用」であり、三人が対立した意志の自由の問題も、解決するのは教義神学の視点からではなく、霊性神学の視点から、また著者の採用する人間学によって可能になるといふ。そして改革者

たちの信仰・霊性の特質を（１）学問の方法論、（２）人間学的な共通理解、（３）「霊性神学」の確立、（４）神学方法論の

四点から考察して、共通部分と相違点を明らかにする。ここまでの紹介でもわかるように、著者の関心は主に方法論に向けられており、それも学問という広い、基本的な分野から初めて人間学というやや新しい概念、そして霊性神学という特殊な分野に向かい、最後に神学という普遍的な枠の中で論じるといった、動的な構造をエラスムスやルター、そしてカルヴァンの文章そのものを提示して見せてくれる。カルヴァンの徒である評者にとって嬉しかったのは、金子氏がカルヴァンの著作、とくに改革者として初期の作品である『ピスコパニキア』をよく読み、そこに霊性の新しい理解を見ていることだ。近年金子氏の関心がエラスムス、カルヴァンにも向けられているのは、氏の愛してやまぬアウグスティヌスへの考察の深化からであろう。

またこの書では同時代への目配りもさることながら、通時的な考察がいくつかのテーマを提示し、読者を刺激する。その一つが「根底概念」である。世俗化によって失われた理

性の「深み」＝「根底」を、著者はエックハルトとタウラーにその淵源を見、ルターからベーメ、シエリング、またドイツ敬虔主義を経てシュライアーマッハーに到るドイツ神秘主義への展開が、近代ヨーロッパの霊性の源流になったととらえる（二六〇頁）。さらに著者は「宗教改革と近代思想の断絶と見えたものは、実は啓蒙主義と敬虔主義との確執が表層面に現われた敵対関係なのであって、深層においては宗教改革と近代思想とはその間に流れる深海流によって繋がっていることが明らかになるであろう」（同所）と言う。この深海流、理性の「根底」を探ることは、困難ではあるが実りのある展望を約束するのである。

「神律」という観点からヨーロッパ精神史を説明しようというのも精力を必要とするテーマだ。ペラギウスとアウグスティヌスにはじまる自由意志論争の中でも有名なエラスムスとルターとの対決について、著者はこう言う。「この論争は調停不能

な矛盾的对立に終始しているように思われるが、そこには一つの合意が成立している。それは恩恵を受容する能力として自由意志を認めることである。この受容において神律は成立するのであるから、両者とも神律に立っている点で合意に達している」（二六四頁）。「神律」というファクターの導入によって合意点が見つかるならばこの論争は従来の理解よりも実り多いものになるのだろう。

「信仰の……独自の作用や機能は外的に観察されないので、現象学の方法によって初めて明らかになる」という文など、もう少し丁寧に説明してほしい箇所が幾つかあったが、この分量でこんなに豊かな内容を盛れるとは、と著者の力量に改めて感じ入った次第である。

（くめ・あつみ＝フランス文学者）
（四六判・二八六頁・本体二〇〇円＋税・教文館）



本館の教文

http://shop-kyokushoin.com/



牧師神学生・信徒必携の書！ A・ベルレユング／C・フレールフェル編 山吉智久訳

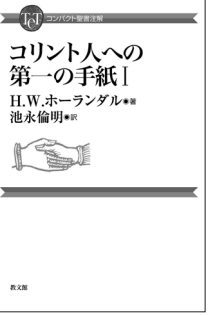
旧約新約 聖書神学事典

旧新約聖書を貫く基本的な概念を、カトリック、プロテスタント共同で解説。信仰の源泉として聖書を読み解くために不可欠な事典。執筆者全15名、全212項目を収録。 ● A5判・680頁・本体18,000円

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
TEL 03-3561-5549
星／図書目録 ●価格は税別

「ジャンプ台」もしくは「命綱」としての注解書
H・W・ホーランド著
池永倫明訳

コンパクト聖書注解 コリント人への第一の手紙Ⅰ



芳賀繁浩

最近注解書を買わなくなつた。教会の会計が苦しいとか子どもの学費が家計を圧迫しているという理由は別にして（それがほとんど全てだという気もするが）、食費を削つても買いたい、買わねばと思わせる注解書が少なくなつたような気がする。神学生の頃、引退された牧師を見舞つた先生が、老先生が刊行されたばかりの克蘭フィールドのローマ書を枕元において、「今度のICCのローマはいいね。君は読んだるかね」と聞いてきたのには参つたと、嬉しそうに話しておられたのを思い出す。もし自分が退院を見込めないような入院をすることで、どんな本を持って行くだろうかと思えると、それが最新刊の聖書注解である可能性はかなり低いような気がする。

まず大きくて重い、ベッドで読むには適切ではない。次に難しい。すぐ眠くなる。ベッドで読むには良いのかもしれないが、同じ箇所を何度も目で追つているというのは悲しい。そして読んだだけで終わってしまう。ほおお、ふうんと感心することはたくさんあるような気がするが、そこから次々と語るべき言葉が湧き上がるとか、逆に飛躍しすぎた思いつきに冷水を浴びせ

てテキストから飛躍させてくれるジャンプ台（ジャンツェ）であり、一方では、飛躍しすぎてコンテキストから外れてしまった説教者を、再び引き戻してくれる命綱（バンジー）であるような注解書である。その意味で本書はまことにしっかりしたジャンプ台であり、命綱であると思う。

ペンテコステ明けからテキストを切り替えるのに合わせてこの注解書を使つてみた。どちらからといえばジャンツェよりはバンジー寄りのような感じがする。もともと、原著では、思い切つて現代風に訳されているというテキストの方で、大きな飛躍がなされているのかも知れない。その意味では翻訳の方も思い切つた現代の日本語を用いた方が、そのコントラストの妙が再現できたのではないだろうか。もともと評者は神学生時代にオランダ語にチャレンジはしたものの挫折した口なので、これは無責任な印象批評ではある。

注解は安心して身を委ねることのできるかつちりしたもので

てくれるとかといったことは見込めないような感じがする。

思うのだが、本格的な注解書と言われているものの中には、肝心の注解の部分が、序論で提示された仮説を立証するための注のように思えてしまふものがある。それこそが、学問的に水準が高いということなのかもしれないが、学術書として完成すればするほど、そこから先への道筋が見えなくなつてしまふような気がする。学問上の偉大な達成なのであるが、それが土曜の夜に頭を搔きむしる現場の牧師にはどうしても他人事に思えてしまふ。著者の意識が、同じように注解書を執筆しているであろう学者仲間に向けられていようような気がするし、エビデンスを重んじ、論理の整合性に心を配らざるをえない学術書の体裁で出版される注解書は、力仕事であり器用仕事（プリコラーヂュ）でもある牧師の机の上では居心地が悪そうである。それは、説教者の課題が、いつどこで誰が語ろうとも変わらない、変わつてはならない学問としての聖書研究から、いかにして、今ここで自分が語るべき説教へと跳躍するかだからである。

臨床の現場が求めるのは、一方では説教者をインスパイアしある。だからといって無味乾燥というわけではない。それは参考文献としてあげられている注解が、オランダ語のもの以外では J. Weis (Göttingen 1910) や G. D. Fee (Grand Rapids 1987) であり、同時代史の研究書がタイセンやミークスであることからわかるであろう。

一週間のうち五日間が会議で埋まつているとか、葬儀が重なつたとか、そんな牧師の緊急事態に、迷わずカバンに入れた注解書である。また、教会員から注解書の選択について尋ねられたときに、レクチャーや注意事項の伝達なしに、安心して勧めることのできる一冊である。早く第Ⅱ巻が出るとよいと思う。

（はが・しげひろ 日本キリスト教会豊島北教会牧師）
（四六判・二七六頁・本体三五〇〇円＋税・教文館）

日本聖書協会
God's Word — Life for the World

聖書を読んだ30人

夏目漱石から山本五十六まで

鈴木範久〔著〕

近代日本人は聖書のメッセージをどう受け取つたのか？
日本キリスト教史の泰斗が深い共感をもつて描く！



各方面で活躍した日本人がキリスト信徒であるなしに関わらず、聖書とどう向き合い、生き方になどどのような影響を受けたか。それを日本キリスト教史の第一人者で、内村鑑三研究家としても知られる鈴木範久氏（立教大学名誉教授）が探りました。

●B6判 ●並製 本体1,600円＋税

ARサービス「ココアR2」
スマホアプリで著者のメッセージ動画を

お問合せ ☎03(3567)1987 頒布部
<http://www.bible.or.jp/>

苦難の中の希望

吉田 隆著

カルヴァンの終末論



加藤喜之

あの震災を体験したのは、本書の元となる博士論文を指導教官へ送った午後だったという。仙台の牧師であった著者は、震災と被曝による死の恐怖というひとつの終末を体験する。だが苦しみのなかで一つとなったキリスト者たちの働きは、もうひとつの終末の姿を彼に与えた。苦難のなかの希望。これこそ震災前に彼がカルヴァンの著作に見出したものである。

十六世紀ジュネーヴの宗教改革者ジャン・カルヴァンの終末論については、いくつかの重要な研究がある。二〇世紀初頭には、カルヴァン研究に一大センセーションを巻き起こしたマルティン・シュルツェの著作、また第二次世界大戦中にはカール・バルト門下生のハインリヒ・クイストルプの研究が出版された。本書は、これらの著作に依拠しつつも、異なる方法論を用い独自の視点を世に問う野心作である。

方法論として著者が重視するのは、ある座標軸のなかでカルヴァンの思想を読み解くというものである。その座標軸とは、教理や教義においてアウグスティヌスやトマス・アクイナスらによる古代・中世の伝統を縦軸とし、ルターやメランヒトンや

ブツァーら同時代の著述家たちの見解を横軸としたものだ。カルヴァンはしばしば独創的な思想家とみなされがちだが、キリスト教の伝統に根ざし、また他の改革者たちの書物に多くを負っていたのである。この座標軸に加えて、本書はカルヴァンの晩年の旧約聖書注解に光を当てる。しばしば一五五九年の『キリスト教綱要』の最終版は、彼の神学の完成とみなされる。そのため一五六四年の彼の死の直前までなされていた預言書の注解が注目されることは少ない。だがそこに著者はカルヴァンの終末論の到達点を見出すのだ。

初期の著作を扱った第二章では、カルヴァンの終末論が未来志向ではなく、目的志向として提示される。終末論というと天へ上昇することや死後の世界という未来が強調されることが多い。だがカルヴァンによると、この世界や歴史には目的があり、それが完成に向けて進むことを彼は終末と呼ぶ。

第三章では、一五三九年版の『キリスト教綱要』が取り上げられる。なかでも重視されるのが「キリスト者の生活について」という一章である。カルヴァンの理解するキリスト者の生

活とは、単に倫理的なものではない。神に捧げる生活ではあるが、禁欲的なものでもなかった。むしろ、来るべき生に向かいつつ、苦難に忍耐をもって向き合う希望の力なのである。

バルトはカルヴァンの『魂の目覚めについて』（一五四二年）をその神学体系の理解に決定的なものとみなしており、クイストルプはこの著作にみられる魂の不滅性についての議論がプラトニ主義的であり、ゆえに非聖書的だとみなした。だが本書第四章によると、「魂の目覚め」とは回心によって開始され、最後の時において完成させられるものである。だからそこには聖書の提示する目的論的な志向が見出されるという。

第五章は、おもにカルヴァンの新約聖書注解に注目しながら、終末論の発展をみている。かなり広範なテキストが扱われており、個々の主題が十分に発展されているとは言い難いが、カルヴァンの成熟した聖書解釈が随所で垣間見られる。

『キリスト教綱要』の最終版を扱った第六章では、肉体の復活に光が当てられる。霊的な復活を語ることが多かった他の改

革者たちに比べて、この点はカルヴァン独自の貢献といってもよいだろう。著者によると、教父たちの書物に親しんでいたことが、カルヴァンの独自性につながったという。

最終章は、カルヴァンの晩年に完成する「キリストの王国」という考えとそれが依拠する預言書注解について論じている。改革者によると、この王国は終末の完成を目指して前進している。そこには成長や改革があり、また、個人のみならず社会や国家も含まれる。しかし、だからといって、カルヴァンがジュネーヴを理想郷とみなしていたわけではない。むしろ現状は迫害や苦難の連続であり、ともすると絶望に打ちひしがれることもあっただろう。そのなかでカルヴァンが希望を持ち続けることができたのは、キリストの王国が常に広がり続けているという確信をもっていたからだと著者は本書を結ぶ。

(かとう・よしゆき) 東京基督教大学神学部准教授
(A5判・二七二頁・本体二九〇〇円+税・教文館)

●生きる意味、空虚感に悩む人々への処方箋

私の生きた証はどこにあるのか

大人のための人生論

H・S・クシュナー

松宮克昌訳

私の人生にはどんな意味があったのか？
生きる意味、空虚感に悩む人々に旧約聖書の言葉などを引用しながら、悩みの解決法を提示。
【岩波現代文庫オリエント版 本体1140円】

なぜ私だけが

苦しむのか

現代のヨブ記

H・S・クシュナー／斎藤 武訳

幼い息子の発病と余命の宣告―理不尽と思える不幸をどう生きたのか。ユダヤ教の教師(ラビ)が自らの体験から紡いだ、深い教智と慰めの書。
【岩波現代文庫 本体1100円】



岩波書店
東京・千代田・一ツ橋
(定価は表示価格+税)

http://www.iwanami.co.jp/

本屋さんを選んだ お勧めの本

松山キリスト教書店 平岡光司

『1分間の黙想 祈りの力』

E・M・パウンス著



1,800円+税
日本聖書協会

日本聖書協会から出版された三六六日分の聖書のみこ
とばとメッセージ、そしてお祈り。毎日忙しい日々を過
ごしている方に、最適な本です。

装丁が美しくポケットサイズで、出張や旅のお伴に
是非お持ち下さい。

『がん哲学外来で 処方箋を』

樋野興夫著



1,500円+税
日本キリスト教団出版局

著者川端純四郎先生は、仙台出身で東北学院大学文学
部キリスト教学科の教員を務め、日本基督教団仙台北教
会のオルガニストでもありました。

2013年5月に亡くなられた後、著者と親交があつ
た方たちによって、28の論文・講演・エッセイが編集さ
れ、この一冊の遺稿集となりました。教会とは？ キリ
スト者とは？ 戦争とは？ それらの疑問に答える、読
みやすくわかりやすい一冊です。

『キリスト教における 死と葬儀』

石居基夫著



1,800円+税
キリスト新聞社

今や二人に一人ががんになり、三人に一人がんで死
ぬ時代にあつて、情報は病状や治療の説明でいっぱい
です。そのような中で、全国でがん哲学外来メデイカル・
カフェが開催されています。一度読んで「がん哲学外
来メデイカル・カフェ」の存在を知ってはいかがでしょ
うか。

松山キリスト教書店

〒790-0804

松山市中二万町1-23

TEL: 089-921-5519

FAX: 089-921-5413

URL: http://www.geocities.jp/matsuyama_1007/index.html

E-mail: sksch@dokidoki.ne.jp

『教会と戦争』

川端純四郎著



2,500円+税
新教出版社

仙台キリスト教書店 黒田 忠

キリスト新聞社刊「ミニストリー」での連載や、「本の
ひろば別冊」で大きな反響があつた論考が単行本とな
りました。キリスト教における死の理解、葬儀の意味など
を明らかにしつつ、実践的、牧会的な視点をもって、看
取りや悼み、死の準備教育など、著者の十数年にわたる
研究がまとめられた本です。

仙台キリスト教書店

〒980-0012 仙台市青葉区錦町1-13-6

東北教区センター・エマオ1F

TEL: 022-2223-2736 (FAX 同)

E-mail: fgwk524@bb.ne.jp



キリスト教書総目録 2017年版

宗教改革500年記念特集 巻頭カラー 森田安二氏 深井智朗氏

内容 総記・年鑑 辞事典 図説年表／全集 著作集 叢書 講座／聖書／聖書学
神学／宗教哲学 思想 倫理／伝記／ライオン／信仰入門書 人生論 説教集
文学／小説 評論 モチエ 詩 劇 音楽 美術 建築 教育 保育 心理 社会福祉
児童 絵本 讃美歌 式文／DVD CD カセット レデオ／キリスト教関連
雑誌 新聞 書名索引／著者索引／掲載出版社名簿

■ A5判 一般頒価1冊286円+税 送料250円
■ お近くの書店様でお求めください。

キリスト教書総目録刊行会

事務局 〒162-8710 東京都新宿区
東五軒町6-24 トーハンビル内
TEL.03-3266-9521

宗教改革500年 記念ウィーク 宗教改革が 問いかけるもの



宗教改革500年

教派・教会を超えてキリスト教会に連なる皆様のみならず、関心をお持ちのすべての方々を対象として、各分野の第一人者による多様なプログラムをご用意いたしました。皆さまのご来場をお待ちしています！

2017年9月12日(火)～9月22日(金) ※定員になり次第締め切ります。お早めにお申し込み下さい。

記念展示会

10:30～18:00
(最終日12:30～17:00)

銀座教会
東京福音会センター

2017
9/12(火)
～17(日)

入場無料

「宗教改革が文化に及ぼした影響」

◆レクチャー

- 9月15日(金) 宗教改革時代の美術
佐川 美智子氏 (元町田市立国際版画美術館 副館長)
- 9月16日(土) 宗教改革と音楽
藤原 一弘氏 (青山学院大学、北海道大学非常勤講師)
- 9月17日(日) 聖書の装丁の歴史
中西 保仁氏 (印刷博物館学芸員)

※レクチャー参加の方は、お申込みが必要です。(定員50名)
Eメール: lib@bible.or.jp FAX 03-3562-7227

エキキュメニカル 晩餐会

(定員150名)

18:00～20:30

帝国ホテル 光の間2階

会費18,000円 (正餐つき)

講師 江口 再起氏

(ルーテル学院大学教授)

「贈与の神学者ルター」

司会 須貝まい子(女優)

音楽ゲスト MCSメサイアコーラルソサエティ合唱団

指揮者 小田 彰氏 (ライトハウス田園調布チャペル牧師)

2017
9/18
(月・敬老の日)



記念講演会

14:30～16:30

有楽町朝日ホール

会費1,000円 (定員600名)

講師 ハンス＝マルティン・バルト氏

(マールブルク大学名誉教授)

「現代世界における
宗教改革の意義」

司会 廣石 望(立教大学教授)

2017
9/18
(月・敬老の日)



記念コンサート 「Hope & Love」

東京オペラシティ
コンサートホール

18:30 開場 19:00 開演

◆PROGRAMS

J. シベリウス 「フィンランディア」
HANDEL 「メサイア」ハイライト 他
SS席 ¥5,000 S席 ¥4,000 A席 ¥3,000 B席 ¥2,000
指揮: 星野 誠
ソプラノ: キム・スヨン テノール: イ・ヨハン
東京シモンフィルハーモニーオーケストラ
東京シモンコーラス 根津コーラス

(チケットお問合せ)
■チケットぴあ 0570-02-9111 ■東京シモンコーラス事務局 03-3351-6004 ■アークノアコンサート 030-5560-3773

宗教改革500年記念行事のために、
お祈りとご支援をお願いします。

2017
9/22
(金)

JBS 日本聖書協会 (ご連絡は広報担当まで)

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 Eメール: info@bible.or.jp
TEL.03-3567-1988 FAX.03-3567-4436 http://www.bible.or.jp/r500/

記念ウィーク
特設サイト→
チケット申込こちら



新刊 自伝的伝道論

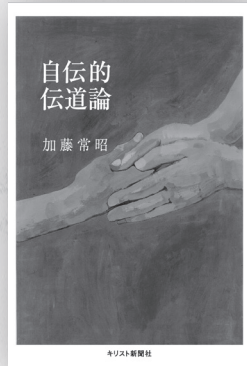
伝道者は福音の言葉を語るのですが
それは福音の言葉を生きると
言っていていいことです。



神学者 加藤常昭

「遺言」として伝道論を語る

四六判・並製・170頁・本体1,600円+税



好評既刊 自伝的説教論 加藤常昭【著】

神の言葉が語られるその場所で、逢いと出来事が起こる

神の言葉を聴き、語り、その言葉に生き続けてきた、
現代を代表する説教者として知られる著者の説教論を、
生い立ちからドイツ留学までの半生を振り返りながらつづる。



四六判・並製・398頁・本体2,400円+税

The Kirisuto Shimbun KiriShin

キリスト新聞全面リニューアル

セカイに届く 言葉をつむぐ

ミライにつなぐ 扉を開ける

好評連載中!

宗教問題
向上委員会

一般のメディアでは提供できない「専門紙」ならではの視点から時事問題を徹底解説。執筆陣には川島堅二(宗教)、池口龍法(仏教)、ナセル永野(イスラム教)、波勢邦生(キリスト教)の各氏。

置かれた場所は途上国

国際支援に従事する「ワールド・ビジョン・ジャパン」のスタッフが、月替わりで生の情報を現地から発信。

教会建築が50周年

国内外の教会建築を芸大出身のライターが、多彩な写真を織り交ぜながら、独自の視点で徹底解説。「目からウロコ」間違いなし!

聖書員日記

北海道から東京、大阪、沖縄の各地で奮闘する全国のキリスト教書店スタッフによるリレー連載。

東洋の聖書

中国、香港、台湾、韓国の諸地域で今、何が起きているのか。近くて遠い東アジアのキリスト教について、複数の執筆者がリアルにレポート。

聖書云々

全国津々浦々の聖書研究会、略して「聖研」を紹介。



電子版
スタート

- 機能も充実
- ・記事横断検索機能
 - ・記事ページお気に入り機能
 - ・配信お知らせ通知
 - ・バックナンバー管理機能



お申込みはこちら

キリスト新聞社 〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1 TEL. 03-5579-2432 E-Mail. support@kirishin.com

■新教出版社

改革者たちの500年(仮題)
——新教コイノニア34

新教出版社編集部編

月刊誌『福音と世界』2017年1月号から6月号まで行われた宗教改革500年を記念する連続特集を、新たな寄稿も増補して単行本化。宗教改革が目指したものの・もたらしたものの、双方を見つめながら、多様な視点から現代の課題を考える。収録する論考は41編。

A5判・224頁・本体予価2100円

ギレアド

マリリン・ロビンソン著／宇野 元訳

2005年にピューリッツァー賞と全米批評家賞を受賞した小説。ギレアドという片田舎の小さな町で、自らの死期を意識する老牧師が、再婚した妻との間にもうけた幼い息子に手紙を書く。その中で、南北戦争以来三代にわたる牧師家系の父子それぞれの信仰のあり方や隣人たちの人生を、様々なエピソードを交えながら、静かな語りをおして振り返る。

四六判・336頁・本体予価3300円

INFORMATION

近刊情報

■教文館

キリスト教教父著作集3―III
エイレナイオス5 異端反駁V

エイレナイオス著／大貫 隆訳

二世紀の偉大な神学者であるリヨンの司教エイレナイオスの主著(全5巻)の第5巻。終末における万物の完成、肉体の復活に関する論述を中心に、救済史的・啓示史的な独自の歴史神学を展開する。全巻邦訳、遂に完結!

A5判・函入・188頁・本体4600円

■日本キリスト教団出版局

井上洋治著作選集9 第2期全5巻《第4回配本》
南無の心に生きる

イエスをめぐる女性たち抄

山根道公編・解題／若松英輔解説

心に渴きを覚える現代人を真の安らぎへと導く南無の心を説く『南無の心に生きる』と、福音書に登場する7人の女性を通してイエスの温かい眼差しに迫る『イエスをめぐる女性たち』を収録。宗教学者・山折哲雄と、カトリック作家・安岡章太郎のエッセイも収める。

A5判・上製・260頁・本体2500円

※一般書店関係の方は、日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zeninikan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター・1771F	022-223-2736	共用		fcqwks24@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区稲毛2-1-1	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	00160-2-18410
アパコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taisindo-books.jimb.com/	taisindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.tugobane.jp/yokohama.cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunshita.coocan.jp/	nagoya-seibunshita@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曾根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶりの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	共用		kobe-kirisyo@mse.biglobe.ne.jp	01150-7-45120
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一丁目1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/matsujama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用		kbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	903-0207	中野区駒形字線777 沖縄キリスト教団出版局	098-943-7221	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

福音と世界

2017年9月号

特集 沖繩——過去・現在・未来

寄稿者 金井創、山城紀子、浜邦彦、一色哲

森宣雄

インタビュアー リチャード・ボウカム氏に聞く

好評連載 台湾キリスト教史（高井ヘラー由紀）、

現代神学の冒険（昔名定道）、詩篇（月本昭男）、

第一テモテ書（辻学）、レヴィナスの時間論（内

田樹）、アメリカの神学と教会のいま（吉松純）、

聖書とわたし（栗原康）ほか

A5判・本体588円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyō-pb.com

編集室から

今春観た映画「沈黙 サイレンス」に触発され、長崎県雲仙にあるキリシタン殉教地「雲仙地獄」を訪れた。ここは箱根の地獄谷や北海道の硫黄山と同じように、火山活動による熱泥が湧き、蒸気が噴き上がる異界である。熱気と硫黄によって草木も生えない環境で、一六二七年から四年間にわたり、キリシタン棄教の拷問が行われた。

実際に行くまで私は「雲仙地獄」が処刑地であると思っていた。しかしここは正式な処刑地ではなく、あくまで棄教させるための施設だったらしい。殉教者は多数出たが、それは拷問途中で死亡してしまった人である。結果としては同じことなのだが、ひと言「棄教する」と言えば放免されるのだから、身体的な苦しみに心は葛藤が凄まじかったにちがいない。しかし多くのキリシタンは棄教するどころか、むしろいつそう信仰を

強くしていった。役人たちは死亡したキリシタンの恨みを恐れ、二度と地上に戻って来ないよう遺体に石をくくりつけて熱泥池の中に沈めたそうだ。

かのキリシタンたちは、どうやって堅固な精神性を保てたのだろう。近世の日本には、宗教的プラクティスである「宗門」や「宗門」はあっても、精神的結晶物であるビリーフ（信仰）はなかったという説がある（磯前順一『宗教概念あるいは宗教学の死』、東大出版会）。しかし十七世紀前半までは、日本にもビリーフがあったのではないか。その具体的証明が「雲仙地獄」である。なぜならキリシタンたちは、どのような責め苦に遭ってもビリーフを棄てることなく、この施設を四年で閉鎖させてしまったからである。（寺田）

本のひろば 2017年10月号 予告

本・批評と紹介…手束正昭著「恩寵燦々と」、G・プラスガー著『カルヴァン神学入門』、エイレナイオス著『異端反駁II—キリスト教教父著作集2・II』、上田光正著『日本の教会の活性化のために』、森田安一著『ハイジ』の生まれた世界』、A・マクケラス著『改訂増補新装 神学のあるこび』他

受容と拒絶の
歴史!



「キリスト教綱要」物語
B・ゴードン 出村彰記 どのように書かれ、読まれてきたか
カルヴァンの『キリスト教綱要』は神学の最高傑作とされた一方、「予定論」
が論争を呼び、アバルトヘイトの神学的根拠にも利用された。教会と政治の
はざまを生きた名著の誕生秘話と影響史。
● 四六判 336頁・本体3,200円

『キリスト教綱要』物語

二つの宗教改革 ルターとカルヴァン

H・A・オーバーマン

日本ルター学会／日本カルヴァン研究会誌



宗教改革の思想的潮流を中世から説き、歴史
学的研究に先鞭をつけた著者による円熟した
論文集。ルターとカルヴァンを中心に、宗教改
革研究を政治的・文化的・神学的に統合した
名著。
● A5判・320頁・本体3,500円

日本キリスト教史 年表で読む

鈴木範久

● A5判・520頁・本体4,600円

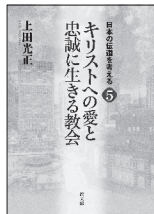
非キリスト教国・日本に、キリスト教がもたらしたのは何であ
ったのか。渡来から現代まで、国家の政治・宗教政策との関係
を軸に足跡を辿り、文化史的・社会史的な影響を問う通史。
巻末に年表(二四九〇―二〇一五年)を収録。

日本の伝道を考える5

キリストへの愛と忠誠に生きる教会

上田光正

● A5判・370頁・本体2,300円



日本人はキリスト教に興味を失っている
のか。それとも教会が引きつけるだけの
魅力を失っているのか。これらの問いに
対し、伝道の歴史を顧み、「キリストの
体なる教会」実現へのイメージを描く。

シリーズ既刊

1 日本人の宗教性とキリスト教

● 本体1,500円

2 和解の福音

● 本体1,500円

3 伝道する教会の形成

● 本体1,900円

4 日本の教会の活性化のために

● 本体2,100円



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 (出版部)
本のご注文は(e-shop 教文館)へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

e-shop 教文館

キリスト教思想史Ⅱ

アウグスティヌスから
宗教改革前夜まで

フスト・ゴンサレス著／石田学訳

8月25日

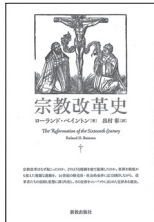
中世とは、夜明けか夕暮れか？ 古代の終焉と近代の誕生を架橋する中世——それはキリスト教に何をもたらしたのか。本書は中世思想史を細部の機微まですくい上げながら、そのダイナミズムを見渡す大きな展望を鮮やかに与えてくれる名編。

既刊 **キリスト教思想史Ⅰ** キリスト教の成立からカルケドン公会議まで
◆A5判・本体5000円

宗教改革史 名著復活！

ローランド・ベイントン著／出村彰 [訳]

宗教改革はなぜ起こったのか、どのような経緯を経て展開したのか。この複雑な運動を、16世紀の歴史的・社会的条件に広く目配りしながら、改革者たちの信仰と思想に深く内在し、その全容をコンパクトにまとめた通史。



◆四六判・本体2800円

待ちつつ急ぎつつ キリスト教講話集Ⅳ

井上良雄著 **好評の講話集、全4巻完結！** ◆新書判・本体1700円



東京神学大学で教鞭を執りつつバルト「和解論」全巻の翻訳に打ち込み、日本基督教団の社会委員長を歴任するなど、信徒として教会に仕えた井上。没後発見された14冊の説教ノートから復元された説教・講演を全4巻に集成。第Ⅳ巻には60年代から90年代までの11編を収録。表題作ほか「神学校における人間形成」「戦争責任の問題」「証人としてのキリスト者」など。

既刊 **Ⅰ 大いなる招待**／**Ⅱ エデンからゴルゴタまで**／**Ⅲ キリスト者の標識**

◆各巻・本体1700円

ジョン・マクマレー研究

宮平望著 **キリスト教と政治・社会・宗教**

マクマレーはスコットランド出身のキリスト教哲学者。「関係としての人間存在」に着目した深い人間論に基づく独自の共同体思想を形成した。ブレア前首相にも影響を与えた。後年はキリスト友会に属し、平和主義者としても影響力をもった。

8月25日

◆A5判・本体2400円



定価七八円(税抜七円)(〒62円)
一年分三〇〇円(送料共)

発行所 〒202-8584 東京都新宿区新小川町九-1 一般財団法人キリスト教文書センター

電話〇三三六〇一五二〇 振替〇〇一七〇一五一 一六七九

発行人 本村利春 編集人 土肥研一 印刷所 (株)平河工業社

発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話〇三三六〇一五六七〇

一九五七年七月一七日 第三種郵便物認可
二〇一七年九月一日発行(毎月三回一日発行)

本のひろば 第七十七号 二〇一七年九月号